

参加者の意見



井之口農園のキャベツ

体験して気づく違い : 八木 進吾

今回私は都市農園というものをはじめて見学させていただきました。他の人の質問にあったように私もわざわざ都市で農業を営むメリットがよくわかりませんが、出荷のスピードと手間の省略という重要なメリットに気づきました。また、早稲田ミョウガやキャベツなど実際に食してみて初めて他の製品との違いに気づき、フィールドワークの大切さに気づきました。個人的な話ですが 100 キロハイクに疲れた体に鞭をうってでも参加して、ほんとによかったです。今後への抱負として、私は文キャン生であり実学の知識がないので、時々話しの内容につまづきかけてしまうときがありましたが、都市形成などには興味があるのでそうならないように予習をしてきたいと思いました。いわき市でのフィールドワーク楽しみにしています。

機会が増えたら農業が少し身近に感じられる : 横溝 三華

「妥協」を許さないという井之口さんの言葉から、強い気持ちを持って農業に従事しており、そのことに誇りを持っていることが伝わってきた。私は今まで農家の方にお話を聞いた経験がほとんどなく、農家が減少しているという事実は知っていたつもりであったけれど、井之口さんが「先の見えない農業」と繰り返し発言されていて、現在及び今後の日本の農業に対する不安を抱えているということを知り初めて実感した気がした。井之口さんの息子さんは畑を消費者に見せる機会があるとおっしゃっていたが、そのような機会が増えたら農業が少し身近に感じられ、生産者と消費者との距離も縮まって、ひいては農家を志す人や農業に従事したいと思う人が増えていく助けにもなるのではないかと思った。

わかっているつもりだったけれど : 内田 萌々子

私の長野の実家は兼業農家で米を生産しています。しかし、父は普段は普通のサラリーマンですので、収穫などは農協さんをお願いしています。このような環境で育ったので、現代の農家が抱える現状の厳しさをわかっているつもりでしたが、今回専業農家の井之口さんのお話を聞き、見学していく中で、自分の考えの甘さや知識の少なさを痛感しました。講座の先輩たちの問題意識の高さからも大きな衝撃を受けました。これからこの講座でやっていけるか不安になりましたが、私なりに農業に対する問題意識を高め、先輩たちに食らいついていきたいと思いを新たにできた良い実習でした。

また、ミョウガタケのピクルスとキャベツの千切り本当においしかったです。実家にもミョウガが生えているのですが、私はあの独特な匂いが苦手で気嫌いしていました。しかし、井之口さんの奥さんが漬けたピクルスは絶品でした。臭みが少なく、触感も最高でした。ありがとうございました。

自分の中で意見を作れるようになった : 洪 慶鐘

農家を見学させて頂いたのは初めてであり、それも都市農家ということで新鮮で興味深いお話を聞くことができました。食料自給率や、TPP など、何かと話題に上がる日本の農業の問題ですが、生の声、意見を聞くことができたので、先の問題について議論する際により説得力のある意見を自分の中で作れるのではと思います。被災地へ現地研修を行う際、農業従事者との関わり方や、どういったことを聞きたいのかをまとめていけると考えます。また、都市農家と地方農家の違いも意識して比較していきたいと思います。

美味しさの「発見」がその先につながる : 室井 美里

1番見学して良かったことは、ミョウガの美味しさに気づけたことです。今までミョウガは食わず嫌いでありあまり食べたことがなかったのですが、美味しいところのものを食べるとやっぱり美味しいんだなと思いました。と同時に、それはどの野菜にも言えることだなと気づきました。私と同じように食わず嫌いの人や、質を気にせず野菜にそれほどお金をかけない人も、より良い野菜があるということは知っているでしょうが、それを実感していないから購入に至らないのだと思います。一度食べてその美味しさを知ることができれば、確実に購買につながるだろうなと思いました。



早稲田みょうがのピクルスの試食

農業は、生命につながる根幹 : 加地 紗弥香

「先の見えない農業」と仰っていたことが、とても印象に残った。全ての農家さんが6次化をすることはできないし、全ての農家さんが日々の作業の合間を縫って独自の販路を開拓することはできない。そのような中で、いかに農業を魅力あるものにし(私はその魅力を十分感じているが)、職業選択の中に入るようにできるか考えていきたいと思う一方で、そもそも、農業に触れる機会はとても限られたものなのではないかと感じた。「農業は、生命につながる根幹」なのに、全く身近ではないのだなと思った。生産者と消費者が分断されている。また、大規模農業で全てを機械化してしまうことに危機感を感じた。まるで、工場みたいだと思う。

食の安全保障～日本の風土、日本人の安全に関わるもの～ : 中川 大和

私は今回まで練馬区という東京都23区内に広い土地で農業を営んでいる方がいることを知らなかった。じっさいに農地に訪れて感じたことはまず「空気がおいしい」「開放的」だった。今まで田舎でしか感じたことのない感覚が都会のど真ん中で感じられることが新鮮だった。また、跡取りの方のお話で「食の安全保障」という概念にふれた。最近の風潮だと構造改革、規制緩和が叫ばれて久しいが、農業は単に儲かればよいという資本主義の原理に単一的に支配されるのではなく、日本の風土、日本人の安全に関わるものであると再確認できた。このような貴重な経験をさせていただいた井之口農園の皆様には心から感謝を申し上げます。

都市でも農業は可能だ : 佐々木 碧衣

今回の、井之口農園におけるフィールドワークでは、都市でも農業は可能だということを学びました。私は今まで、農業といったら大きな敷地を要するため、郊外でしか行えないものだと思っていましたが、単価の高い野菜を育てたり、有機野菜にしたりすることによって農業が可能であり、消費地には近いという条件を生かすことが大事だと思いました。ただ、儲けるためだけに農業をするのではなく、環境への好影響や避難場所の確保という点は新たな発見でした。しかし、その都市農業を守っていくためには、政府やJAのバックアップが足りない、ということも印象的でした。補助金や販売方法を改善しない限り先が見えない農業というのは恐ろしいことで、どうすれば改善していけるのか、考えてみたいと思いました。都市には、都市にあった農業形態が重要で、伝統野菜を守り流通を増やすことが大切だと感じました。

都市住民も経済尺度だけで生きているわけではない : 井上 修弥

最も興味深く感じられたのが、農地は多面的な機能が求められるという話であった。農村地理学ではよく聞く話ではあるが、都市の農地に関しては、ほぼ調べたことがないので、新鮮だった。都市の農地は経済的には足を引っ張るものなのかもしれないが、都市住民も経済という価値尺度だけで生きているわけではないので、生産以外の農地の機能も都市に必要であると思えた。

また、企業の新規参入に感じても井之口さんの話を聞いて、私は必要だと思えた。井之口さんも企業とは競合せずに企業のできないことをやると仰っていたが、逆に、企業にしかできないことも多いためである。ただし、過度に商業的になると実習生問題と似たような結果になりそうで、法律でのきつめの整備が必要であると思う。

都市型農園だからできていることをもっと拡大していく : 宮田 湧

都市農園の一番のデメリットが税金であることに驚いた。最初は水や空気などの環境的要因から味が落ち

てしまうものかと想像していたが、試食させていただいた限りではそんなことはなくて、とてもおいしかった。みょうがはリーガロイヤルホテルなどにもおろしているということで、こういった都市型農園だからできていることを、もっと範囲を拡大してできるのであれば(地方の農園も都市部へ直卸できるのであれば)未来があるのかなと感じた。

農業は国の根幹であり、日本は輸入が止まったら餓死してしまう国になるのではないか(ならないように農業をがんばっている)という話があったが、少し農業に対する印象が変わった。やはり地味なイメージを持っていたが、国を守ることにそのものであるし、かなり社会貢献性の高い仕事なのだと感じた。

個人農家がどう生き残るか : 田中 奏子

住宅街でマンションが並ぶ中、突然と開けた場所があり、さらにそこには一面キャベツが植わっていて、とても驚いた。私の想像していた農園とは違い、純粹に「こんな場所で農業ができるのか?」と疑問に思った。しかし、お話を聞いていると、農業に対してとても真摯に向き合っておられることが伝わり、また、最後に食べさせてもらったキャベツの美味しさから、周囲を高い建物に囲まれながらもここは立派な農園であると認識した。

不動産収入に切り替えたほうが収入では安定するだろうが、それでも農業を続けておられるということはそれほど農業に対して強い思いがあるのだろうと感じた。企業が農業分野に進出してきたことについての話は、農業をやっておられる方だからこそその視点で気づかされることがあった。

これから、個人農家が大規模農家とどう付き合っていくのか、ということについて学んでいきたいと思った。



早稲田みょうがたけの軟化栽培の説明をする井之口喜實夫氏



都市における専業農家のあり方を話す井之口勇喜夫氏

小さい単位だからこそできる役割、可能性 : 藤井 里帆

今回の実習を通して個人経営で農業を営むことの力強さを感じた。日本の自給率を上げよとしても、個人が動いたところで大きな変化は起こらない。社会を前にして個人の力は小さいかもしれない。それでは、個人に何ができるのか。農業に企業が入ったらどうなるかのお話の中で、井之口さんは企業がこぼした隙間を自分たちは埋めていくのだという話をされていた。個人に大きな力はないかもしれないが、小さい単位だからこそできる役割、可能性を感じた。そして、私たちは大きな力を支援していくのではなく、この小さな力にしっかりと目を向け、耳を傾けていくことが大切である。小さな力がなくなった時、社会は崩れていくと思う。小さな力をそのまま維持させていく、育てていく社会の仕組みを整えていきたい。

生産品に熟知している生産者が、商品化まで関わることの重要性 : 片桐 あゆみ

私がこの授業をとったきっかけは、食とは生きる上での基盤であるのに、日本の自給力が弱いため、なにか私たちが考え、変えていけることはないのだろうか、と思ったことでした。井之口さんのお話の中で、日本の食に関しての不安をきくことができました。実際の農家さんの声がきけたことで、やはり私の危機意識は私の思い過ごしではなかったのだと実感しました。井之口さんのお話の中で、何回か、地元のホテルなどに食材提供をして使ってもらっている、ということが言われていました。今までは、授業で6次化についてきいても、私の中であまり具体性を持ってなかったのですが、今回の見学を経て、食べ方による品種の使い分け方までを熟知している生産者が、製品化まですることの重要性が感じられました。後継者不足の問題解決にもつながるかもしれません。そのため、新たな行政サポートや、農協を通じたネットワークづくりがあればいいのに、と思いました。



早稲田みょうがの育成状況を見る井之口喜實夫氏

品種の個性を知り尽くした農の戦略化を : 清水 拓貴

井之口農園さんに行って一番衝撃を受けたことは、農園が予想以上に大きかったことです。畑も家も、僕の地元の農家さんに全く劣らないくらい立派でした。都会の真ん中にあるような静かな空間があることは、人にとっても生き物にとっても居心地のよいものだと思います。

井之口さんのお話からは農家のプライドを感じました。農業は生き物が相手の仕事なので、些細な誤差というものは仕方のないものだと思います。しかし井之口さんは作物の植え方から箱のサイズまで、少しの妥協もなく、職人のように細かいところまで拘りを持って作物を育てていました。自然の領域である作物のサイズまで正確に合わせようと努力しているところはまさに農家としてのプライドなのだと感じました。

また、農業に関する面白い知識もたくさん得ることができました。例えば、同じキャベツでも早稲・中手・奥手という3つの品種を使って収穫期をずらしていることはとても新鮮でした。

農業ブランド化 机上の空論にならないよう : 久野 純

井之口農園でさまざまなお話を伺い、さらには試食の機会を通して日本の高付加価値農業の発展の難しさを感じました。企業的農業を行うアメリカや人件費のローコストで作物の価格を抑えることのできる東南アジアの農家たちを相手にして競争に勝っていくためには作物の付加価値を高めていき、ブランド志向のある消費者のニーズに応えていくほかありません。しかしはたしてそうしたことは机上の空論に過ぎないのではないかという思いが、試食会を通して得た感想でした。私はある諸事情により一週間のうちに何度かキャベツの千切りを口にすることがあるため今回いただいた作物の他の一般的なものとの違いが伝わってきたのですがほかの多くの方の感想を聞く限りでは残念ながらあまり思わしくない感想が目立ちました。食料を競争のテーマの一つにすること自体が間違いではないのかとこの経験と最後に伺ったお話の二つの側面から考えさせられることになりました。

都市農業の優位性を伸ばす : 倉田 順希

これまで、都市農家は地方の農家と比べ土地も狭く、地価も高いことから生産性及び経済性において大きなディスアドバンテージがあるという印象が強く、経営状況は厳しいのではないかという懸念があった。しかし、今回の見学会を通してこのような欠点だけではなく生産地に近いことから直接消費者に売り込むことができたりする優位性があるということを知り、日本の農業に対する考え方が大きく変わるきっかけとなった。これから世界的に人口が爆発的に増加していく中で食糧不足は避けては通れない問題であると考えられる。現在、日本は多くの食料を輸入に頼っているが画期的な食糧生産システムが生まれにくい限り世界各国が食糧不足に陥り、日本に輸出できないという状況になりかねない。そうならないためにももっと農業に従事しやすいような環境づくりも重要になってくるのではないだろうか。

農家の意見や思いを大切にしながら行動できるように : 水野 朱理

今まで農家の方にお話を直接うかがったことがなかったので、農家の方の農業へのこだわりや苦勞、将来についての考えなどを聴くことができとても貴重な体験をさせていただきました。また、農業についての知識があまりなく、知らないことがほとんどだったので税金がかかったり販売の仕方にちがいがあったりするなど知らなかったことを知ることができ、農業についてもっと知りたいと思うきっかけになりました。これから復興支援をするにあたってもっと農業について知識を増やし、農家の方々の気持ちなどをより理解できるようにならなければいけないと感じました。今回の体験を活かして、これから農業についてもっと学び、農家の方々の意見や思いも大切にしながら行動できるようになりたいと思いました。

奮闘している人を支援する : 柴原 理沙

まず、石神井公園駅に降り立って歩いていると、大きい道路があり住宅が立ち並び中、急に農園風景が現れたことに非常に驚きました。地域の緑化という点でも都市農業は非常に大きな役割を果たしていると思います。また、野菜を栽培するために使う水は井戸水を使っているということで都市農業という農業としては少し特殊な形態でありながら、品質には非常にこだわっていることが分かりました。さらに、井ノ口さんは専業農家であることに誇りを抱いているとお話していましたが、東北に行けば、同じように誇りを抱いている専業農家はたくさんいると思います。この授業を通して、震災の影響を受けてもなお農業に誇りを抱き、よりよい品質の野菜や果物等を育てるために奮闘している東北の農家の方々を支援する活動ができればいいなと思いました。4限の授業が延長したため遅れての参加となりましたが、貴重なお話を聞き美味しい野菜を食べることができてよかったです。

日本は農家個人にかかる負担が重すぎる : 三上 栞

井之口さんのお話を聞いて、特に私が感じたことは、私が認識していた以上に経営が難しいのだということです。野菜を作ること自体難しく、時間、労力、忍耐力を要する作業です。球根によって育ち具合も異なり、天候にも左右されます。特に近年は地球温暖化による予測困難な異常気象がおきています。そのような環境の変化にも対応しなければならぬ上に、農業の収入で生活している以上、何をどれぐらい作り、どこに販売すれば採算がとれるか、面積あたりの収穫量やコストを考えることが重要になります。これら全てを井之口さん個人がこなしていかなければならず、その負担は計り知れません。今の日本の農業は、井之口さんのような個人の小さな農家によって支えられているにもかかわらず、農家個人にかかる負担が重すぎるように感じました。井之口さんの「ずるずると先の見えない農業をやっている人がつづけている」という言葉が特に印象に残りました。



今後の都市農業振興政策のあり方、JAグループへ期待される役割について

小規模農家に配慮した政策が必要： 背戸 裕太郎

井之口さんは農業を続ける理由について、農業、食は国の根幹であると述べていました。また、日本は元来農業を個人で細々と行ってきたとも話していました。私はこれからの日本の農業のありかたについて、小規模農家に配慮した政策が必要であると感じた。

行政の農業者への支援の薄さ： 藤田 壘

「キャベツより軽いハウレンソウに切り替えていくかもしれないですね……」というコメントと最後のほうに行政の農業者への支援の薄さという話は私が見学の最初のほうで畑の歴史や自分のしている農業のやりがいを楽しそうに話していた井之口さんを見て感じた生き生きとした姿に影をさすものだった。自分は飲食業のキッチンのアルバイトで先輩の方からモノづくりの楽しさを聞いて、また自分も食品を扱うという経験を通して少し違うところはあるけれどそういったやりがいなどは少し知っている。ただ、アルバイトの私と違い人生をかけて農業に携わっている井之口さんがそういった農業への規制を厳しくする上へ感じている憤りは全く質が違う。おそらく自分が農業の道へ進むことはほとんどないと思うが、別の形で影響を与えていくことはできるのだろうと感じもっと広い視野を身につけようと思いました。

国は現場の声を拾えていないミスリーディング： 柳澤 実佳

都市農園の農家さんとは、都会に居ながらも農家を営んでおられる方々というイメージを前回の授業で学びましたが、実際に訪問してみて、都会の中で急に畑が現れた、という距離感にとってもビックリしました。井之口さんは、大雑把にやるのではなく、細部にまでこだわり抜いた農作業をされていることが伝わり、農園を営んでいく情熱を息子さんも含め強く感じとれました。農家さんは、コストも大きくかかる上に、農作物の価格が

低迷しているせいで利益を十分に回収することが難しい、というお話が印象的でした。国は、農家同士の競争力が足りない、などの指摘をするが、それは現場ベースの農家さんの声を拾えていないことからくるミスリーディングであると思いました。国の方針が、農家さんの声を拾えるようになるには、やはりJAのような大きな、声として発信することが出来る存在の活動が問われるのだと思いました。

さらに！防災の視点をまちづくりに活かす : 呉地 梨紗

農業という、緑の多い山村付近、田舎で行うというイメージを強くもっていた。歩いていると、アパートの隙間から大きな木が現れ、背の高い建物の中に突如農園が現れたことにとっても驚いた。私の地元は南足柄で、生まれてからずっと農村と呼ばれるところで育ってきたため、最近は都会中心に活動している中、ある種のなつかしさを感じた。

また、災害などに備えて、その場所の密度に合わせて空間が必要だとおっしゃっていたことを聞いて、災害の多い日本で、どのように町の空間設計をしていくかということが大切であるということを改めて実感した。災害に対するまちづくりを研究していきたいと考えているので、今後論文を書くうえでひとつの調査ポイントになるのではないかと思った。



都市農地の環境、防災、子育て、教育等に果たす役割は重要

(日時)

2015年 6月 2日

(非売品)

(タイトル)

都市農業振興の現状と展望

(共編者)

早田 宰・加藤基樹

(発行)

169-0051

東京新宿区戸塚町 1-103 STEP21

早稲田大学

平山郁夫記念ボランティアセンター

(問い合わせ)

早田 宰

03-5286-1907

sohda@waseda.jp